

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 23 日現在

機関番号：31403

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22592532

研究課題名（和文） 小児がん経験者の学校生活におけるサポート体制に関する研究

研究課題名（英文） A Study on a School-life Support System for Childhood Cancer Survivors

研究代表者

奥山 朝子（OKUYAMA ASAKO）

日本赤十字秋田看護大学・看護学部・准教授

研究者番号：20465800

研究成果の概要（和文）：

入院中の学校とのつながりについて小児がん経験者の小学生 6 割、中学生 3 割が満足していたが、復学後の友人関係で傷付いた言動を体験していたのは小学生 3 割、中学生 4 割であった。経験者は学校に「病気の理解」、「学習の遅れの理解」、「特別扱いしない」、「本人の意思尊重」を要望していた。

小児がん患児を学校で担当した経験のある教師は約 1 割、養護教諭は約 3 割と少ない状況にあり、教師と養護教諭は学校内での小児がん患児の情報共有と連携、さらにチームで関わる必要性を望んでいた。また、医療者と学校との連携のためにコーディネーターとしての役割を看護師に求めている。

看護師の調査では、学校との連携に看護師の介入を必要としており、そのためには【連携】、【学校の理解と協力】、【学習支援】、【友人関係の支援】、【家族支援】、【連携システムの構築】を必要としていた。

小児がん患児がスムーズに復学するためには学校側と医療者との連携が重要で、看護師は患児と家族を支えながら、時期を逸することなく患児の復学を見据えた入院中からの支援が重要である。

研究成果の概要（英文）：

A survey of childhood cancer survivors showed that 60% of elementary school students and 30% of junior high school students were satisfied with the relationships that they had with their schools; however, 30% of the former and 40% of the latter reported being hurt in some way by the words and behaviors of their peers after they had returned to their teachers. Furthermore, survivors wanted their schools “to understand their disease,” “to understand why they are falling behind in class work,” “not to treat them differently,” and “to respect their own will.”

In addition, a survey of teachers and school nurses showed that only around 10% and 30%, respectively, had ever had students with childhood cancer, indicating that it is relatively uncommon. The surveyed teachers and school nurses also reported the need for greater information sharing and cooperation within the schools that they worked at, as

well as greater teamwork among their colleagues. Furthermore, they wanted nurses to facilitate coordination between medical professionals and schools to better support student cancer survivors.

Then, a study on nurses showed that they felt the need for “coordination” and “understanding and cooperation from schools,” along with “study (learning) support,” “support for relationships with peers and friends,” and “family support” for childhood cancer survivors, as well the “establishment of a cooperation system.”

In order to help students with childhood cancer smoothly return to their schools, it is vital that schools and medical professionals cooperate with each other and that nurses provide appropriate, timely support from the moment these children are admitted to the hospital. Nurses must always keep mind their goal—to ensure that student patients eventually return to school.

#### 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合 計
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
2012 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総 計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：小児がん看護 復学支援 連携 学校生活 サポート体制

#### 1. 研究開始当初の背景

医療の進歩により小児がん患児は、病気を克服し学校や社会で生活できるようになってきている。しかし、学童期、思春期の小児がん患児は発達段階の特性に加え治療の副作用による容姿を気にし、入院期間中の学習の遅れや級友との関わりが希薄な状態で復学することになる。また、復学時は級友同様に学校での活動ができないことが小児がん患児の学校生活での自己効力感の低下につながりクラスでの自己の存在感やアイデンティティに影響をもたらすことになる。

家族もまたわが子の復学に多くの困難や不安を持ちながら子どもの学校生活を支えている。患児の復学について、患児本人と家族が問題としていること、学校や医療者に求められることを明らかにし、小児がん患児の退院後の学校生活を支えるための医療者と学校との連携の在り方に関する研究は少なく、問題点と連携の在り方に関する研究は重

要である。

#### 2. 研究目的

学童期・思春期にある小児がん患児がスムーズに学校生活を送るために入院中からの学校とのつながり、復学後の学校生活における医療と教育の連携の在り方を明確にすることを目的とする。

(1)平成 22 年度：小児がん患児の復学後の心理社会的側面から患児と家族の問題点とニーズを明らかにする。

(2)平成 23 年度：①小児がん患児が在籍していた学校の養護教諭、担任教師を対象に患児の学校生活におけるそれぞれの役割の遂行上の困難及び解決策と求めるニーズを明らかにする。

②亡くなった学童期の小児がん患児からもたらされる級友への影響について明らかにする。

(3)平成 24 年度：入院中の小児がん患児の学

校との連携に関する現状と看護師の認識を明らかにし、連携のために必要な事柄について考察する。

### 3. 研究方法

(1)平成 22 年度：小児がん患者と小児がん患者の家族を対象に自記式の質問紙調査。

(2)平成 23 年度：①A 県内の小学校と中学校の教師、養護教諭、スクールカウンセラーを対象に自記式の質問紙調査。

②復学し再度入院後に亡くなった小児がん患者の級友だった成人男女 3 名を対象に自記式の質問紙調査。

(3)平成 24 年度：小児がん患者の治療をしている病院の看護師を対象に自記式の質問紙調査。

実施した研究は、所属大学の倫理審査を受け承認された後に実施。

### 4. 研究成果

(1)平成 22 年度：小児がん経験者 36 名（回収率 75.6%）の結果を分析した。小学生の時に復学した経験者は 18 名、中学生 14 名、高校生 4 名で、女子 13 名、男子 23 名であった。復学後から現在までの経過年数は 1 年未満から 14 年であった。

小児がん経験者の復学時の気掛かりは、「健康」、「学習」、「友人関係」、「通学」が小学生、中学生に共通していた。（図 1）

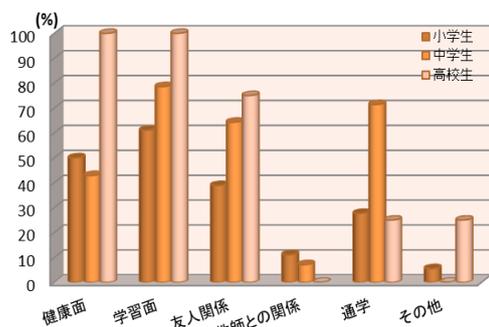


図 1. 復学時の気掛かり

入院中の学校とのつながりについて「満足」としたのは小学生 6 割、中学生は 3 割であった。中学生は担任教師に「連絡がほしかった」など自分が不在中の学校の様子について情報を得られないことに満足していなかった。

学習面は、「殆どの級友ができていることが、自分はできないこと」、「受験の心配」が問題となっていた。

友人とのつながりの維持については、約 5 割の小・中・高校生が「よい」としていた。

復学後の友人関係では、「友人との距離感がある」、「話題についていけない」、「気を使われることが心苦しい」としていた。小学生

3 割、中学生 4 割の経験者が級友からの言葉で傷ついており、その時の対策は「理由を話す」、「無視する」、「コミュニケーションをはかる」などであった。

復学時、級友に小児がん経験者の復学について説明をする者は、小学生は担任教師、中学生は担任教師、家族、自分であった。

入院中の小児がん患者と学校とのつながりが希薄なことは、患者の自己の存在、社会的分離の苦痛が精神的、身体的苦痛を増すこととなる。学校との密なつながりにより患者のみならず級友への良い影響をもたらすことにつながると考える。

家族がわが子の復学の状況について、家族 55 名（回収率 70.2%）を分析した結果を以下に示す。

復学した小児は小学生 32 名、中学生 18 名、高校生 5 名であった。

入院中の学校とのつながりに、家族が「満足」していた理由は、級友からの連絡、担任教師の学習支援であった。「不満」の理由は、「連絡不足」であった。家族とわが子との復学準備では、小学生の家族の中には精神的強さをわが子にもとめ、いじめへの対応について準備していた。（表 1）

表 1 家族との復学準備内容

カテゴリー	家族との準備	学校との準備
体調	<ul style="list-style-type: none"> <li>・病後まで卒業すること。</li> <li>・体調に合わせて、無理しないこと。</li> <li>・復学の日は無理せず休んでおくこと。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・病院から送られた生活面の注意事項を精読し、健康状態や禁止しなければいけない事、復学と関係する上、行わないこと。</li> <li>・卒業と連絡の必要。</li> <li>・給食で食べられないものがあり、自宅から持参すること。</li> </ul>
容姿と友人関係	<ul style="list-style-type: none"> <li>・髪の色がないこと。</li> <li>・顔のむくみは病気が治ったら必ずもとに戻ること。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・髪を染めたいが、子どもを守ってほしい。</li> <li>・いじめの対象にならないか。</li> <li>・友人のこと。</li> <li>・みんなと同じように特別扱いほしくないこと。</li> <li>・かつらと帽子をして通学すること。</li> </ul>
心構え	<ul style="list-style-type: none"> <li>・病気で闘ったあなたは強い子だから大丈夫。</li> <li>・受け入れられても、受け入れられないこと。</li> <li>・転校生の同級生、前の学校の同級生に感謝しようと思った。</li> <li>・いじめなどがあったらすぐに話すこと。</li> </ul>	
学習		<ul style="list-style-type: none"> <li>・勉強が遅れているのでゆっくり見守ってほしい。</li> <li>・もう一度さそをやること。</li> <li>・欠席日数の確認と授業で不利にならないか。</li> <li>・行事の授業や運動会に参加することは関係があること。</li> </ul>

学校との復学準備では、医師や看護師に出席を希望する家族もあった。学習困難に対する家族の対応は、小児の体力を考慮しながら、通信教材や家庭教師を活用していた。経済的余裕のない中学生の家族は自己学習を小児に勧め、あるいは家族が教えていた。また、機械的に在籍年限だけで中学を卒業させられることに疑問を持つ家族もいた。

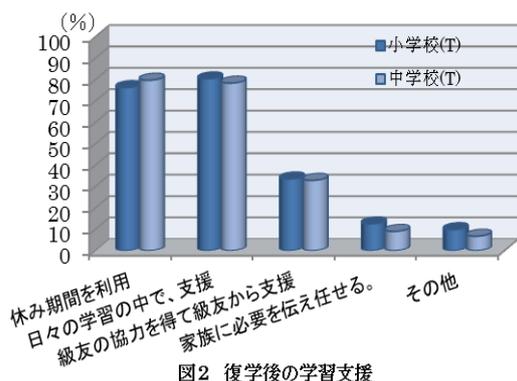
友人関係は、小学生はかつらをしていることを級友や学年の違う児童にひやかされ学校を嫌がり、学校へ解決策を家族が求めている。中学生では、入院中に友人関係が変化してしまったことに家族が相談を受けていた。

家族から学校に対する要望は、小学生の家族は「友人関係への配慮」で、中学生の家族は「学習面に関する事」であった。

家族は小児を守るための防衛としてこのようにせざるを得ない状況にあると考える。また中学生の家族は「見守るだけ」としていたが、この言葉に秘められている親の気持ちを理解し、小児と家族の周囲にいるすべての大人が協力し、復学する小児が小児らしく学校で活動できるよう環境、特に友人関係を入院中から継続して整えていく必要がある。

(2)平成 23 年度：①A 県内の小・中学校の教師、養護教諭（以下 SNs とする）を対象に調査を実施。回収率は教師 82.7%（517 名）、SNs 78.2%（256 名）であった。教師、SNs とも 40、50 歳代が 8 割であったが、小児がん患児の担当経験のある教師、SNs は約 1 割、約 3 割であった。

9 割以上の教師が入院中の患児とのつながり維持のためには「級友の手紙」、「教師の面会」が必要とし、約 6 割は「患児・家族とできるだけ連絡をとる」であった。学籍移動について、9 割以上の教師は「自校の児童生徒と捉える」とし、学習の遅れについて、約 8 割の教師が「日々の学習や長期休みを利用して支援する」としていた。（図 2）



復学後の友人関係は、5 割以上の教師、SNs が「入院前と変わらない」とし、約 4 割以上の教師、SNs は「級友が困惑する」であった。

約 4 割の教師・SNs が復学後の関わりで不足を感じるのには「医療的知識と健康管理」、「入院中・復学後の小児・家族の心理」であり、さらに SNs は「復学した小児・家族との面接技術」であった。

小児がん患児の担当経験のある教師は、入院中の患児とクラスとの交流や連絡を密にする必要性があり、クラス運営は在学していた時同様 机を設け、係りや日直、当番活動などに名前を入れること、患児の話題を避けない等を重要としていた。（表 2）

教師や SNs は医療者に対して学校生活上のアドバイス、連携と連絡体制の確立、入院中の情報提供、本人が学校生活で健康上の対処

能力獲得のための指導、心理的サポートの継続、看護師にはこの他に学校とのコーディネーターとしての役割を要望していた。またスクールカウンセラーには連携、患児・家族・他の生徒や教師の相談やサポートを望んでいた。SNs は教師に自然な受け入れと準備、保護者との連携、患児の心理の理解と対応、他の生徒への説明と理解、チームでの関わりを望み、教師は SNs に医学的知識のアドバイス、連携、健康管理、復学した児童生徒のサポート、医療者との連携を望んでいた。

表 2. 経験教師のクラスでの存在維持のための方法

項目	内容
つながりのための方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・担任の面会からのクラスへの情報伝達</li> <li>・手紙、メール、メッセージ</li> <li>・教師が級友への面会を促す(中)</li> <li>・授業ノートをクラスメートが順番で作る。(中)</li> <li>・学級通信を送る(中)</li> </ul>
日常性の維持	<ul style="list-style-type: none"> <li>・患児をクラスで話題にすることを避けない。</li> <li>・配布物、グループ分けにも患児を入れる。</li> <li>・患児の机をそのままにする。</li> <li>・道徳の時間や学級活動で、どのようなことができるか話し合う。</li> <li>・患児の作品をみんなと同じように掲示する。</li> <li>・係り、日直、当番活動班などに名前を入れる。</li> <li>・復学したときがクラスのスタートであると担任が語る。</li> <li>・スムーズな復学のための準備</li> </ul>

(中)：中学教師

友人関係では患児の容姿の変化に伴う問題がある。教師は級友に「簡単に説明する」としており、中学生の患児の中には自分で説明したほうがよいとする意見もあり、説明を担当教師と決めつけることなく患児本人の意見も尊重することが重要で、病気に関する知識をもつ SNs の積極的な関わりが必要と考える。また、容姿の変化については入院中から級友との交流が積極的におこなわれていれば、級友の心の準備にもなり、級友への影響も最小限になると考える。

同胞の級友への説明は「ある程度は説明する」としているが、クラス以外の児童生徒への影響も認識しており、普段から「病気といのち」などの健康教育が大切であり、「共に生きる」、「共に育つ」学習の機会として大切にする必要がある。

学校と医療者が患児の入院中から連携することは、復学後の患児の健康管理面や心理面への対処を容易にし、患児の復学後の学校生活を支援していく上で、より良い対処につながると考える。

結論：

1. 小児がん患児を学校で担当した経験の

ある教師は約1割、養護教諭は約3割と経験者は少ない。

2. 入院による学籍移動があっても学校側は自分の学校の児童生徒と捉え、約8割の教師が入院中の学習の遅れに対して日々の学習や長期の休みを利用して学習支援する、としている。
3. 復学後の患児の健康管理について、6割以上の教師・養護教諭が知識不足としている。
4. 学校側が復学後の患児との関わりで必要な事であるが不足を感じているのは、「病気や健康管理に関する知識」と「入院中、及び復学後の患児・家族の心理」である。
5. 教師、養護教諭、スクールカウンセラーいずれも学校内での情報共有・連携して関わることを望んでおり、中でも養護教諭は復学する患児にチームで関わることを望んでいる。
6. 学校側は医療者側との連携、連絡体制の確立を望んでいる。
7. 経験のある教師は、医療者と学校との連携のためにコーディネーターとしての役割を看護師に望んでいる。

平成23年度：②復学して再入院後に亡くなった小児がん患児の級友で、現在は成人期にある男女3名に質問紙調査を実施。

患児は幼稚園のときに発症し入院を繰り返して、低学年の時に亡くなった。級友3名とも幼稚園から一緒に、患児が亡くなった時のことを鮮明に記憶していた。

級友と患児は幼少からの友人であり、クラスも一緒という結びつきにあった。

患児の入院中も机がクラスにあり、入院中の相互の情報交換によりクラスの一員として級友は患児を認識する環境にあった。患児の容姿の変化を「がんばってきた」というメッセージと級友は受けとめ、いたわりの行動がとれ結びつきを強めていた。教師はビデオレターなど作成する時間を設けており、この時間が級友への思いやりの心を育てる機会となっていた。患児と級友との関係で重要なことは(1)クラスの仲間意識の維持(2)継続した相互の連絡(3)つながりを強化する情報交換(4)思いやりの心を育てる機会(5)患児・家族の理解である。こうした環境が級友へのプラスの影響要因になっている。患児の死の知らせは級友には衝撃的で、生と死の意味づけをするためには多くの人々の支えが必要であり、級友はお葬式をお別れの場所と認識し、患児の父親がわが子の死について級友に「病気を治すお薬を探しに行った」という言葉や教師が提案したお別れの手紙にそれぞれの気持ちを表現することで、級友は患児を再配置できていた。

患児喪失後も級友は成長し、この衝撃的体験が人生までも左右する大きな影響を及ぼしていることが明らかで、級友との結びつきの維持が重要で、周囲の大人は環境を整えることが重要である。

結論：

1. 入院前からの【親密さ】、【強い結びつき】と入院中のつながりの維持により、級友は患児をクラスの一員として、仲間として意識している。
2. 患児の死に直面した級友の心情は【衝撃】、【悲しみ】であり、【生と死の意味づけ】をするには多くの人々の支えが必要である。
3. 患児の死を通して、級友は【命の尊さ】、【健康の大切さ】に気づかされ、患児は級友の【心の支え】、【人生の伴奏者】、【忘れられない存在】として【進路への影響】を及ぼしていることが示唆される。

(3)平成24年度：小児がん治療を行っている全国の医療施設117施設に依頼し55施設・看護師296名から承諾を得、151名から回答(回収率51.0%)を得た。

入院中の患児・家族、地元校と医療者とのつながりの必要性について、殆どの看護師が認識していた。現状は、約5割の看護師は、小・中学生の患児は地元校との連携がとれているとしていた。

地元校と連携していくために看護師の介入の必要性については、「介入したほうがよい」は小学生、中学生の両者とも58.3%で、経験年数別では10年以上の経験看護師は7割以上であり、「患児・家族に任せる」は小学生26.5%、中学生27.8%であった。

患児と地元校の級友との関わりについての看護師の認識について、表4に示した。

復学する患児と地元校の級友について「心配」に思う看護師は小学低学年に対しては77.5%、高学年89.4%、中学生93.4%であった。

スムーズな級友関係を維持していくためには【学校の理解】、【級友への対応】、【学校生活準備と支援】、【多職種との連携】をあげていた。

患児の復学後に予測される困難は、「感染症の問題」と「体調管理」が小・中学生ともに7割以上の看護師が挙げていた。

学校での対処法の指導とその評価は、「指導により理解できており、十分に対処できる」としたのは小学低学年4.0%、小学高学年6.6%、中学生で17.2%であった。「指導により理解でき、対処できる」はそれぞれ19.2%、39.7%、45.0%であった。「指導しているが理解があいまいで、対処できるとはいえない」がそれぞれ47.0%、29.8%、14.6%であった。「指導していないのでわからない」はそれぞれ

れ 18.5%、13.2%、13.2%であった。8 割以上の看護師は指導の評価で小学校高学年に対しては 4 割以上、中学生では 6 割以上の看護師が患児の学校での対処により評価を持っていた。

学校側に知っておいてほしいことは小学生、中学生ほぼ同様の結果であった。内容としては、【復学後の健康管理のポイントと方法】、【病気治療に関する知識】、【副作用に関する知識】、【復学後の患児の心理の理解】、【入院中の患児の心理の理解】、【入院中の家族の心理の理解】、【復学後の家族の心理の理解】であった。

上記の内容で看護師が指導可能とした内容は「復学後の健康管理のポイントと方法」が小学生 41.7%、中学生 40.4%で、「入院中の患児の心理」20.5%、22.5%、「患児入院中の家族の心理」20.5%、19.9%で無回答が 39.7%、39.1%であった。

看護師は家族への要望として、学校と家族が連絡をとってもらうために【家族からの学校への対応】、患児の心身の状況を正しく把握し【患児の心身への対応】、看護師が把握しきれない【家族の不安の表出】、【周囲への対応】などであった。

患児のスムーズな復学のために、入院中から地元校とのつながり維持が必要とする認識が看護師にあっても具体的に取るためには、教育的側面に看護師がどう支援していくかという困難感もあるのではないかと考える。患児の入院中、看護師は患児・家族の真のニーズを把握し、患児の復学を視野に入れた早い時期からの復学への支援対策を進めていくことは地元校教師との連携強化になり、患児のスムーズな復学につながると考える。

看護師は病院内のチームと地元校教師との連携を図っていく上で、互いに理解し患児の復学をめざした支援策を共に考えていくことが重要と考える。患児、家族を中心とした他職種と協働して支援していくために看護師はコーディネーターとしての役割を担っていくことが重要である。

#### 結論

1. 患児・家族と地元校との連携は 5 割の看護師が取れているとし、つながりについても 6 割の看護師が患児・家族と学校とのつながりを感じている。
2. 学校との連携に約 6 割の看護師が看護師の介入が必要としているが、入院当初、入院後状態が落ち着いてからの介入が必要、とした看護師は約 6 割である。
3. 学校とのつながり維持のために必要なこととして【連携】、【学校の理解と協力】、【学習支援】、【友人関係の支援】、【家族支援】、【連携システム】としている。
4. 復学後の学校生活への看護師の指導で、

小学校高学年と中学生について約 7 割の看護師が患児自身で対処できるとしているが、5 割の看護師は実践中の復学準備に工夫の必要性を認識している。

5. 患児の級友関係について殆どの看護師は心配に思っており【学校側の理解】と【級友の理解】を必要とし、具体化のためには【学校の理解】、【級友への対応】、【学校生活準備と支援】、【多職種との連携】としている。

#### 5. 主な発表論文等

[学会発表] (計 5 件)

1. 奥山朝子, 復学した小児がん経験者の心理的状況, 第 9 回 日本小児がん看護学会, 2011. 11. 27, 前橋商工会議所.
2. 奥山朝子・森美智子・渡辺 新・戸井田ひとみ: 家族からみた小児がん経験者の復学状況, 第 9 回 日本小児がん看護学会, 2011. 11. 27, 前橋商工会議所.
3. 奥山朝子, 亡くなった学童期の小児がん患児がもたらした級友への影響, 第 22 回 日本小児看護学会, 2012. 7. 21, いわて県民情報交流センター.
4. 奥山朝子, 入院中のつながりと復学後の小児がん患児への学校側の認識, 第 10 回 日本小児がん看護学会, 2012. 12. 2, パシフィコ横浜会議センター.
5. 奥山朝子, 小児がん患児の担当経験のある学校側の対応と要望, 第 10 回 日本小児がん看護学会, 2012. 12. 2, パシフィコ横浜会議センター.

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

奥山 朝子 (OKUYAMA ASAKO)  
日本赤十字秋田看護大学・看護学部・准教授  
研究者番号: 20465800

##### (2) 研究分担者

森 美智子 (MORI MICHIKO)  
日本赤十字秋田看護大学・看護学部・教授  
研究者番号: 10248966

##### (3) 連携研究者

なし

##### (4) 研究協力者

渡辺 新 (WATANABE ARATA)  
中通総合病院・診療部長  
戸井田 ひとみ (TOITA HITOMI)  
秋田市医師会立秋田看護学校・副学校長  
阿部 美里 (ABE MISATO)  
日本赤十字秋田看護大学・看護学部・助手